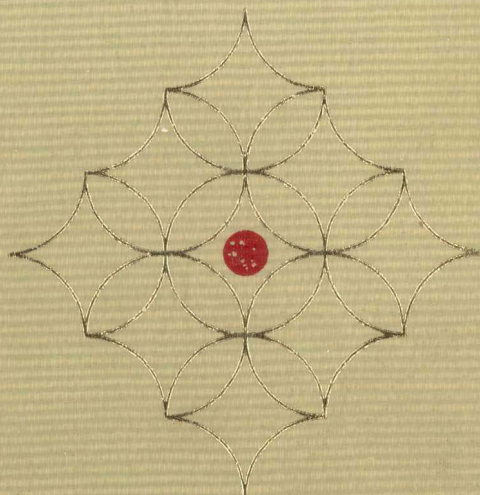




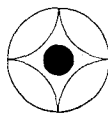
現代日本文學大系

6

北村透谷集
山路愛山



筑摩書房



現代日本文學大系 6

昭和四十四年六月五日

初版第一刷発行

北村透谷・山路愛山集

著者

発行者

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八

筑摩書房

郵便番号一〇一―一九一

電話東京(二九一)七六五一

振替口座東京四一二三

印刷 株式会社 精興社

製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

CS 10006

北村透谷集 目次

卷頭写真
筆蹟

楚囚之詩

三

蓬萊曲

九

蓬萊曲別篇

三

詩

みゝずのうた

三

一点星

四

孤飛蝶

五

ゆきだふれ

五

平家蟹

五

髑髏舞

七

古藤菴に遠寄す

八

弹琴と嬰兒

八

ほたる

八

蝶のゆくへ

八

眠れる蝶

八

双蝶のわかれ

八

露のいのち

八

我牢獄

四

星夜

四

宿魂鏡

「日本の言語」を読む

当世文学の潮摸様

時勢に感あり

泣かん乎笑はん乎

「マンフレッド」及び

「フォースト」

厭世詩家と女性

粹を論じて「伽羅枕」に及ぶ

「伽羅枕」及び「新葉末集」

「平和」発行之辞

想断々(1)

想断々(2)

哭

毛

弄

弄

容

容

空

空

空

充

空

空

空

漫言一則

松島に於て芭蕉翁を読む

「油地獄」を読む

最後の勝利者は誰ぞ

トルストイ伯

一種の攘夷思想

「歌念仏」を讀みて

徳川氏時代の平民的理想

三日幻境

各人心宮内の秘宮

心機妙変を論ず

処女の純潔を論ず

他界に対する観念

酉

酉

戌

亥

子

丑

寅

卯

辰

巳

午

未

申

秋窓雜記	二三	熱意	一四
鬼心非鬼心	二五	国民と思想	一五
「罪と罰」	二七	主のつとめ	一五
富嶽の詩神を思ふ	二八	客居偶録	一五
人生に相渉るとは何の謂ぞ	三〇	「桂川」(吊歌)を評して情死に及ぶ	一五
山庵雜記	三四	情熱	一六
明治文学管見	三六	哀詞序	一六
実行的道德	三七	思想の聖殿	一六
復讐・戦争・自殺	三八	兆民居士安くにかある	一六
頑執安排の弊	四〇	万物の声と詩人	一六
人生の意義	四二	漫罵	一七
賤事業弁	四四	一夕觀	一六
内部生命論	四五	劇詩の前途如何	一六

エマルソン小論

二五

明治文学史

二六四

日記・書簡・手記

一七

凡神的唯心的傾向に就て

二五四

唯心的、凡神的傾向に就て

二九五

山路愛山集 目次

詩人論

二九六

荻生徂徠

二九八

誰か大学と戦ふ者ぞ

三三三

進め光明にまで

三三五

余は何故に帝國主義の信者たる乎

三三六

七博士に与ふる書

三三八

現代日本教会史論

三三

現時の社会問題及び社会主義者

三三三

英雄論

三三

唯物史觀

三六一

信仰個条なかるべからず

三五

北村透谷君

三六五

頼襄を論ず

三六

透谷全集を読む

三六五

夷隅河畔より (抄)

三六

〔付録〕

北村透谷の短き一生

島崎藤村 三七

キリスト者としての透谷

笹淵友一 三七

“戦士・詩人・思想家”

の生誕

色川大吉 三〇

愛山山路弥吉君

徳富蘇峰 三六

山路愛山の文学

平岡敏夫 四二

透谷と愛山

中山和子 四九

年譜

四九

著作目録

四七

北村透谷集

開業の世評

透谷

段十

来比事...

...

...

うたふのりのふしに...

とあつた辨明の中。

...

...

枕邊に立ちけるの運を...

物の数に...

...

...

...

...

...

楚囚之詩

自序

余は遂に一詩を作り上げました。大胆にも是れを書肆の手に渡して知己及び文学に志ある江湖の諸兄に頼たんとまでは決心しましたが、実の処躊躇しました。余は実に多年斯の如き者を作らんことに心を寄せて居ました。が然し、如何にも非常の改革、至大艱難の事業なれば今日までは黙過して居たのです。

或時は翻譯して見たり、又た或時は自作して見たり、いろいろに試みますが、底事此の篇位の者です。然るに近頃文学社界に新体詩とか変体詩とかの議論が騒しく起りまして、勇気ある文学家は手に唾して此大革命をやつてのけんちと奮発され数多の小詩歌が各種の紙上に出現するに至りました。是れが余を激励したのです、是れが余をして文学世界に歩み近よらしめた者です。

余は此「楚囚の詩」が江湖に容れられる事を要しませぬ、然し、余は確かに信ず、吾等の同志が諸共に協力して素志を貫く心になれば遂には狹隘なる古来の詩歌を進歩せしめて、

今日行はるゝ小説の如くに且つ最も優美なる靈妙なる者となすに難からずと。

幸にして余は尚ほ年少の身なれば、好し此「楚囚の詩」が諸君の嗤笑を買ひ、諸君の心頭を傷くる事あらんとも、尚ほ余は他日はれが罪を償ひ得る事ある可しと思ひます。

元とより是は吾国語の所謂歌でも詩でもありませぬ、寧ろ小説に似て居るのです。左れど、是れでも詩です、余は此様にして余の詩を作り始めませう。又た此篇の楚囚は今日の時代に意を寓したものではありませんから獄舎の模様なども必ず違つて居ます。唯だ獄中にありての感情、境遇などは聊か心を用ひた処です。

明治廿二年 透谷橋外の僑寓に於いて

四月六日

北村門太郎謹識

第一

曾つて誤つて法を破り

政治の罪人として捕はれたり、
余と生死を誓ひし壮士等の

数多あるうちに余は其首領なり、

中に、余が最愛の

まだ蕾の花なる少女も、

国の為として諸共に

この花婿も花嫁も。

第二

余が髪は何時の間にか伸びていと長し、
前額を蓋ひ眼を遮りていと重し、
肉は落ち骨出で胸は常に枯れ、
沈み、萎れ、縮み、あゝ物憂し、
歲月を重ねし故にあらず、
又た疾病に苦む為ならず、
浦島が帰郷の其れにも

はて似付かふもあらず、
余が口は涸れたり、余が眼は凹し、
曾つて世を動かす弁論をなせし此口も、
曾つて万古を通貫したるこの活眼も、

はや今は口は腐れたる空氣を呼吸し
眼は限られたる暗き壁を睥睨し
且つ我腕は曲り、足は撓ゆめり、
嗚呼楚囚！世の太陽はいと遠し！

噫此は何の科ぞや？
たゞ国の前途を計りてなり！
噫此は何の結果ぞや？
此世の民に尽したればなり！

去れど独り余ならず、
吾が祖父は骨を戦野に暴せり、
吾が父も国の為めに生命を捨てたり、
余が代には楚囚となりて、

とこしなへに母に離るなり。

第三

獄舎へ！ つたなくも余が迷入れる獄舎は、

二重の壁にて世界と隔たれり

左れど其壁の隙又た穴をもぐりて

逃場を失ひ、馳込む日光もあり、

余の青醒めたる腕を照さんとして

壁を伝ひ、余が膝の上まで歩寄れり。

余は心なく頭を擡げて見れば、

この獄舎は広く且空しくて、

中に四つのしきりが境となり、

四人の罪人が打揃ひて――

曾つて生死を誓ひし壮士等が、

無残や狭まき籠に繋れて！

彼等は山頂の鷲なりき、

自由に喬木の上を舞ひ、

又た不羈に清朗の天を旅し、

ひとたびは山野に威を振ひ、

慍惇なる熊をおそれしめ、

湖上の毒蛇の巢を襲ひ

世に畏れられたる者なるに

今は此籠中に憂き棲ひ！

四人は一室にありながら

物語りする事は許されず、

四人は同じ思ひを持たねず、

そを運ぶ事さへ容されず、

各自限られたる場所の外へは

足を踏み出す事かなはず、

たゞ相通ふ者としては
同じ心のためいきなり。

第四

四人の中にも、美しくしき

我花嫁……いと若かき

其の頬の色は消失せて

顔色の別けて悲しき！

嗚呼余の胸を撃つ

其の物思はしき眼付き！

彼は余と故郷を同じうし、

余と手を携へて都へ上りにき――

京都に出で、琵琶を後にし

三州の沃野を過りて、浜名に着き、

富士の麓に出で、函根を越し、

遂に花の都へは着たりき。

愛といひ恋といふには科あれど、

吾等双個の愛は精神にあり。

花の美しくしきは美しくしけれど、

吾が花嫁の美は、其蕊にあり。

梅が枝にさへづる鳥は多情なれ、

吾が情はたゞ赤き心にあり。

彼れの柔き手は吾が肩にありて、

余は幾度か神に祈を捧たり。

左れどつれなくも風に妬まれて、

愛も望みも花も萎れてけり。

一夜の契りも結はずして

花婿と花嫁は獄舎にあり。

獄舎は狭し

狭き中にも両世界――

彼方の世界に余の半身あり、

此方の世界に余の半身あり、

彼方が宿か此方が宿か？

余の魂は日夜独り迷ふなり！

第五

あとの三個は少年の壮士なり、

或は東奥、或は中国より出でぬ、

彼等は壮士の中にも余が愛する

真に勇豪なる少年にてありぬ。

左れど見よ彼等の腕の縛らるゝを！

流石に怒れる色もあらはれぬ――

怒れる色！ 何を怒りてか？

自由の神は世に居まさぬ！

兎は言へ、猶ほ彼等の魂は縛られず、

磊落に遠近の山川に舞ひつらん、

彼の富士山の頂に汝の魂は留りて、

雲に縋し月に戯れてありつらん、

嗚呼何ぞ穢なき此の獄舎の中に、

汝の清浄なる魂が暫時も居らん！

斯く云ふ我が魂も獄中にはあらずして

日々夜々軽るく獄窓を逃伸びつ

余が愛する少女の魂も跡を追ひ

諸共に、昔の花園に舞ひ行きつ

塵なく汚なき地の上にはふバイラレット

其名もゆかしきフォゲットミイナツト

其他種々の花を優しく摘みつ
ひとふさは我胸にさしかざし
他のひとふさは我が愛に与へつ
ホツ！ 是は夢なる！
見よ！ 我花嫁は此方を向くよ！
其の痛ましき姿！

嗚呼爰は獄舎
此世の地獄なる。

第六

世界の太陽と獄舎の太陽とは物異れり
此中には日と夜との差別の薄かりき、
何ぜ……余は昼眠る事を慣として
夜の静なる時を覚め居たりき、
ひと夜。余は暫時の坐睡を貪りて
起き上り、厭はしき眼を強ひて開き
見廻せば暗さは常の如く暗けれど、
なほさし入るおぼろの光……是れは月！
月と認れば余が胸に絶えぬ思ひの種、
借に問ふ、今日の月は昨日の月なりや？
然り！ 踏めども消せども消えぬ明光の
月。
嗚呼少かりし時、曾つて富嶽に攀上り、
近かく、其頂上に相見たる美くしの月
美の女王！ 曾つて又た隅田に舸を投げ、
花の懷にも汝とは契をこめたりき。
同じ月ならん！ 左れど余には見えず、
同じ光ならん！ 左れど余には来らず。

呼べど招けど、もう
汝は吾が友ならず。

第七

牢番は疲れて快く眠り、
腰なる秋水のいと重し。
意中の人は知らず余の醒たるを……
眠の極樂……尚ほ彼はいと快し
嗚呼二枚の毛氈の寢床にも
此の神女の眠りはいと安し！
余は幾度も軽るく足を踏み、
愛人の眠りを攪さんとせし。
左れど眠の中に憂のなきものを、
覚させて、其を再び招かせじ。
眼を鉄窓の方に回へし
余は来るともなく窓下に來れり
逃路を得んが為ならず
唯だ足に任せて来りしなり
もれ入る月のひかり
ても其姿の懐かしき！

第八

想ひは奔る、往きし昔は日々に新なり
彼山、彼水、彼庭、彼花に余が心は残れり、
彼の花！ 余と余が母と余が花嫁と
もろともに植ゑにし花にも別れてけり。
思へば、余は暇を告ぐる隙もなかりしなり。

誰れに気兼ねするにもあらねど、ひそひそ
余は獄窓の元に身を寄せてぞ
何にもあれ世界の音信のあれかしと
待つに甲斐あり！ 是は何物ぞ？
送り來れるゆかしき菊の香！
余は思はずも鼻を聳えたり。
こは我家の庭の菊の我を忘れで、
遠く西の国まで余を見舞ふなり。

あゝ我を思ふ友！
恨むらくはこの香

我手には触れぬなり。

第九

またひとあき余は晚く醒め、
高く壁を伝ひてはひ登る日の光
余は吾花嫁の方に先づ眼を送れば、
こは如何に！ 影もなき吾が花嫁！
思ふに彼は他の獄舎に送られけん、
余が睡眠の中に移されたりけん、
とはあはれな！ 一目なりと一せきなりと、
(何ぜ、言葉を交はす事は許されざれば)
永別の印をかはす事もかなはざりけん！
三個の壮士もみな影を留めぬなり、
ひとり此広間に余を残したり、
朝寝の中に見たる夢の偽なりき。
噫偽りの夢！ 皆な往けり！
往けり、我愛も！
また同盟の真友も！

第十

倦み来りて、記憶も歲月も皆な去りぬ、
寒くなり暖くなり、春、秋、と過ぎぬ、

暗き物憂さにも余は感情を失ひて

今は唯だ膝を組む事のみ知りぬ、

罪も望も、世界も星辰も皆尽きて、

余にはあらゆる者皆……無に帰して

たゞ寂寥……微かなる呼吸——

生死の闇の響なる。

甘き愛の花嫁も、身を抛ちし国事も

忘れはて、もう夢とも又た現とも！

嗚呼数歩を運べばすなはち壁、

三回まれば疲る、流石に余が足も！

第十一

余には日と夜との区別なし、

左れど余の倦たる耳にも聞きし、

暁の鶏や、また時に急ぐ鳥の声、

兎は言へ其形……想像の外には曾つて見ざり

し。

ひと宵余は早くより木の枕を

窓下に推し当て、眠りの神を

折れども、まだこの疲れたる脳は安らず、

半分眠り——且つ死し、なほ半分は

生きてあり、——とは願はぬものを。

突如窓を叩いて余が霊を呼ぶ者あり

あやにくに余は過にし花嫁を思出たり、

弱き腰を引立て、窓に飛上らんと企てしに、
こは如何に！ 何者……余が顔を撃たり！

計らざりき、幾年月の久しきに、

始めて世界の生物が見舞ひ来れり。

彼は獄舎の中を狭しと思はず、

梁の上梁の下俯仰自由に羽を伸ばす、

能き友なりや、こは太陽に嫌はれし蝙蝠、

我無聊を訪来れり、獄舎の中を厭はず、

想ひ見る！ 此は我花嫁の化身ならずや

嗚呼約せし事望みし事は遂に来らず、

忌はしき形を仮りて、我を慕ひ来るとは！

ても可憐な！ 余は蝙蝠を去らしめず。

第十二

余には穢なき衣類のみなれば、

是を脱ぎ、蝙蝠に投げ与ふれば、

彼は喜びて衣類と共に床に落たり、

余ははひ寄りて是を抑ゆれば、

蝙蝠は泣けり、サモ悲しき声にて、

何ぜなれば、彼はなほ自由を持つ身なれば、

恐るゝな！ 捕ふる人は自由を失ひたれ、

卿を捕ふるに……野心は絶えて無ければ、

嗚呼！ 是は一の蝙蝠！

余が花嫁は斯る悪き顔にては！

左れど余は彼を逃げ去らしめず、

何ぜ……此生物は余が友となり得れば、

好し……暫時獄中に留め置かんに、

左れど如何にせん？ 彼を留め置くには？

吾に力なきか、此一獣を留置くにさへ？
傷ましや！ なほ自由あり、此獣には。

余は彼を放ちやれり、

自由の獣……彼は喜んで、

疾く獄窓を逃げ出たり。

次ぎの画は甚しき失策でありました、是れでも著名なる画家と熱心なる彫刻師との手に成りたる者です。野辺の夕景色としか見えませぬが、獄舎の中と見て下さらねば困ります。



第十三

恨むらくは昔の記憶の消えざるを。

若き昔時……其の樂しき故郷！

暗らき中にも、回想の眼はいと明るく、

画と見えて画にはあらぬ我が故郷！

雪を戴きし冬の山、霞をこめし溪の水、

よも変らじ其美しくさは、昨日と今日、

——我身独りの行末が……如何に

浮世と共に変り果てんとも！

嗚呼蒼天！ なほ其処に驚は舞ふや？

嗚呼深淵！ なほ其処に魚は躍るや？

春？ 秋？ 花？ 月？

是等の物がまだ存るや？

曾つて我が愛と共に逍遙せし、

樂しき野山の影は如何にせし？

摘みし野花？ 聴きし溪の樂器？

あゝ是等は余の最も親愛せる友なりし！

有る——無し——の答は無用なり、

常に余が想像には現然たり、

羽あらば歸りたし。も一度、

貧しく平和なる昔のいほり。

第十四

冬は厳しく余を悩殺す。

壁を穿つ日光も暖を送らず。

日は短し！ して夜はいと長し！

寒さ臉を凍らせて眠りも成らず。

然れども、いつかは春の歸り來らん。

好し。顧みる物はなしとも、破運の余に、

たゞ何心なく春は待ちわぶる思ひする。

余は獄舎の中より春を招きたり、高き天に、

遂に余は春の來るを告られたり、

篤に！ 鉄窓の外に鳴く篤に！

知らず、そこに如何なる樹があるや？

梅か？ 梅ならば、香の風に送らる可きに、

美しい声！ やよ篤よ！

余は飛び起きて、

僅に鉄窓に攀ち上るに——

篤は此響には驚るかで、

獄舎の軒にとまれり、いと静に！

余は再び疑ひそめたり……此鳥こそは

真に、愛する妻の化身ならん。

篤は余が幽霊の姿を振り向きて

飛び去らんとはなさずして

再び歌ひ出でたる声のすゞしき！

余が幾年月の髣髴を払ひて、

卿の美しくき衣は神の恵みなる、

卿の美しくき調子も神の恵みなる、

卿がこの獄舎に足を留めるのも

また神の……是は余に与ふる恵なる、

然り！ 神は篤を送りて、

余が不幸を慰むる厚き心なる！

嗚呼夢に似てなほ夢ならぬ。

余が身にも……神の心は及ぶなる。

思ひ出す……我妻は此世に存るや否？

彼れ若し逝きたらんには其化身なり、

我愛はなほ同じく獄裡に呻吟ふや？

若し然らば此鳥こそ彼れが靈の化身なり、

自由、高尚、美妙なる彼れの精靈が

この美しくき鳥に化せるはことわりなり、

斯くして、再び余が憂鬱を訪ひ来る——

誠の愛の友！ 余の眼に涙は充ちてけり。

第十五

篤は再び歌ひ出でたり、

余は其の歌の意を解き得るなり、

百種の言葉も聴き取れば、

皆な余を慰むる愛の言葉なり！

浮世よりか、將た天国より來りしか？

余には神の使とのみ見ゆるなり。

嗚呼左りながら！ 其の練れたる態度

恰かも籠の中より逃れ來れりとも——

若し然らば……余が同情を憐みて

來りしか、余が伴たらんと思ひて？

鳥の愛！ 世に捨てられし此身にも！

篤よ！ 卿は籠を出でたれど、

余は死に至るまでは許されじ！

余を泣かしめ、又た笑ましむれど、

卿の歌は、余の不幸を救ひ得じ。

我が花嫁よ、……否な篤よ！

おゝ悲しや、彼は逃げ去れり

嗚呼是れも亦た浮世の動物なり。

若し我妻ならば、何と逃去らん！

(明治三十二年四月)

余を再び此寂寥に打ち捨て、
この惨憺たる墓所に残して

——暗らき、空しき墓所——

其処には腐れたる空氣、

湿りたる床のいと冷たき、

余は爰を墓所と定めたり、

生ながら既に葬られたればなり。

死や、汝何時来る？

永く待たすなよ、待つ人を、

余は汝に犯せる罪のなき者を！

第十六

鶯は余を捨てゝ去り

余は更に快鬱に沈みたり、

春は都に如何なるや？

確かに、都は今が花なり！

斯く余が想像中央に

久し振にて獄吏は入り来れり。

遂に余は放されて、

大赦の大慈を感謝せり。

門を出れば、多くの朋友、

集ひ、余を迎へ来れり。

中にも余が最愛の花嫁は、

走り来りて余の手を握りたり。

彼れが眼にも余が眼にも同じ涙——

又た多数の朋友は喜んで踏舞せり。

先きの可愛ゆき鶯も爰に来りて

再び美妙の調べを、衆に聞かせたり。

蓬萊曲

序

蓬萊曲將に稿を脱せんとす、友人某來りて之を一読し詰て曰く、蓬萊山は古來瑞雲の變遷くところ、衆仙の盤桓するところ、汝何すれぞ濫に靈山を不祥なる舞台に仮り來つて狂想者を悲死せしむる。又た何すれぞわが邦固有の戲曲の躰を破つて擅に新奇を銜はんとはする。

余は直に之を遮つて曰く、わが蓬萊曲は戲曲の躰を為すと雖も敢て舞台に曲げられんとの野思あるにあらず、余が乱雑なる詩躰は詩と謂へ詩と謂はざれ余が深く関する所にあらず、韻文の戰爭は江湖に文壇の良將あり、唯だ余が此篇を作す所以の者は、余が胸中に蟻扼せる感慨の幾分を寒燈の下に、彼の蚕娘の営々として織糸を其口より延べ出る如く余が筆端に露洩せしむるに過ぎざるのみ、然も彼れが勞むるは家を造りて之に入らんとするなれども余が昼間劇務の後に滴々半烹の句を成すところの者は徒に余をして債を起して償ある白紙を反古と化せしむるに止まらんを知る。

蓬萊山は大東に詩の精を迸発する、千古不變の泉源を置けり、田夫も之に対してはインスピレイションを感じ、學童も之に対して詩人となる、余も亦た彼等と同じく蓬萊嶽に対する詩人となれること久し、回顧すれば十有六歳の夏なりし、孤筇其絶巔に登りたりし時に余は始めて世に鬼神なる者の存するを信ぜんとせし事ありし。崎嶇たる人生の行路遂に余をして彼の瑞雲横はり仙翁衆しく棲めると言ふ靈嶽を仮り來つて幽冥界に擬し半狂半真なる柳田素雄を悲死せしむるに至れるなり。友人再び曰く、然らば汝は魔鬼魅魘の類を信ずるや。余答へて曰く、信ずるにもあらず、信ぜざるにもあらず、悲哀極つて頓眠する時に神女を夢み、劇熱を病んで壁上に怪物の横行するを見るが如きのみ。友人乃ち放笑して去る。此に於て童子をして燈に油を加へしめ筆を走らせて談話の概略を記し以て序に代ふ。

明治二十四晩春

透谷橋外の小樓に於て
蟬羽子識

曲中の人物

鶴翁

(蓬萊山の道士)

源六

(樵夫)

雪丸

(仙童)

柳田素雄

(子爵、修行者)

勝山清兵衛

(柳田の従者)

露姫 (仙姫)
大魔王、鬼王若干、小鬼若干、
恋の魅、青鬼、等。

第一齣 (一場)

蓬萊山麓の森の中
日没後

(柳田素雄琵琶を抱きて森中に徘徊し従者勝山清兵衛少し晩れて来る。素雄琵琶を取出て一彈(調)を成さず仰て蓬萊嶽の方を眺(睇)する所)

素、雲の絶間もあれよかし、
わが燈火なる可き星も現はれよ、
この身さながら浮萍の

西に東に漂ふひまのあけくれに
なぐさめなりし斯の靈山、
いかなれば今宵しも、麓に着きて

見えぬ、悲しきかな。

恋しき御姿の見えぬはいかに、
わが心、千々に碎くるこの夕暮。
都を出で、

わがさすらひは春いくつ秋いくつ、
守る閑なき歳月を、軽しとて仇し
草わらんじ。会釈なく履きては
捨て、履きては捨て、踏みてはのこし
踏みてはのこす其述は